

日本東京に於て開催せらるゝことを希望する旨の意見を提出すべき訓令を付與されたならば、どんなにか喜ばしいことであらうと考へた。蓋し昭和九年ともなれば帝都復興の事業は完成を告げ、又大會參列の諸外國人が視察旅行に出かける地方の道路も略々改良されるであらうと豫見したからである。そこで私は今度こそ——明年の大會に出席する我が、政府代表が其の席上に於て「次の會議は日本東京に於て」と演説し得るならば如何程嬉しいことであらうと、今微笑みつゝべンを走らせて居る。

## 三陸津浪と道路

前川 貫一

非常時突發に際して道路が如何に重要な役割をなすかは、その都度吾人の痛感する所であるが、今春三月三日三陸を襲つた津浪に當つて更にその感を新しくした次第である。當時の被害は岩手、宮城兩縣を通じて死傷者約四千名流失倒壊家屋約五千七百戸その他漁具漁船の流失、耕地の荒廢等極めて甚大に、近來稀に見る悲惨事であつた事は今なほ吾人の記憶に新しい所であつて、災害、土木費國庫補助規定に據る復舊費のみで二日朝四萬圓を算した事實と以てしてもその一斑を推す事が出来るのである、復舊工事中道路橋梁工事關係のものは二百六十三ヶ所、約百萬圓で全工費の約半を占めて居る。津浪は地震に伴ふものとの豫感を以つて逸早く避難せし町村は勿論、襲來を比較的早く知つて避難した町村にあつては

殆んど死傷者が皆無であつた事實に鑑み、多數の死傷者を出した町村に對しては平素の覺悟の程が非難されないではないが、當時避難すべき道路橋梁が早くも、破壊されて道路を斷られた、又は高地に取付くべき適當なる避難道路が無かつた爲めに、可惜貴重なる人命を損つた者が相當多かつたのである。

岩手縣氣仙町長部港にあつては、高地に通ずる橋梁が津浪の初期に流失した爲め、又同縣唐丹村本郷部落に於ては、高地に通ずる避難道路が不完全であつたが爲めに特に死傷者が多かつたと傳へられて居る。

故に此等海岸道路の復舊に當つては堅固なる護岸工事を施して第一防禦線たらしめ、河口の橋梁は須く永久構造とすべきは論を俟たず、尙部落より背面高地に通ずる避難道路の築造も亦忽にすべからざるを痛感する次第である。

此度の災害について罹災民は齊しく配給の迅速と救護の周到とを感謝して居るが、此は縣當局の適當なる措置と一般の厚き同情とに依つたのは勿論であるが、一面自動車と之を通ず道路とが後方地帯との連絡を完成ならしめた事實を忘れてはならない。

東北沿岸地方は元來物資の乏しい所である、配給救護の途がかく敏活に講じられなかつたならば、その慘禍の程は測り知られなかつたであらう。

平時の交通用具たる船舶を一掃された當時にあつて、殊に一刻を争ふ火急の場合に處しては、衣類食糧及建築材料の配給、救護班の活躍、隣接町村よりの應援、應急修理班の活動等一として自動車に依らざるは無かつたのである。當時罹災民は自動車を賭る早天に雲霓を望む思ひがした事であらう。

宮城縣下の雄勝濱、岩手縣下の長部港、釜石港等、災害後數日ならずして復興の氣分横溢せりと傳へられたのは、既改修路線の効果に負ふ所が極めて甚大である。

之に反して岩手縣下の綾里村の如きは流失家屋約二百二十戸死者百六十四名と云ふ大被害を蒙りながらも、後方連絡の途皆無の爲め、特派された驅逐艦に依つて數日後にして初めて救護された由である。

由來東北沿岸は地形の然らしむる所、文化的施設一般に後れ、道路の改修の如きもその例に洩れず、路線名のみで未改修の儘のものが多々ある。

宮城縣下の大原、女川、雄勝と結ぶ線、岩手縣下の宮古、小本、久慈を連ぬる線等皆然りである、のみならず中心地と海岸樞要地とを結ぶ線も完全とは云ひ難い。

此等は何れも非常時に際しての必要路線たるのみならず、平時産業開發の見地よりするもその改修は一日も忽にすべからざるものである。此の他住宅地域の設置に當つての町村内の連絡道路及避難道路兼用の幹線道路の築造も亦極めて肝要である。

兩縣當局が、津浪對策を講ずるに當つて、海岸護岸、防浪堤の築造、津浪通報機關の設備、住宅地域の設定等を計畫すると共に、諸部落を連絡すべき海岸道路、後方中心地よりの連絡道路、及避難道路等の改修に總工費の約半を割かんとするのは寔に理の當然とする所である。